

報告

# 一徳島大学パイロット事業支援プログラムー 「歯科医療系学生の口腔保健・福祉体験実習による健康長寿支援」 の実施報告

伊賀 弘起<sup>1)</sup>、日野出 大輔<sup>1)</sup>、中野 雅徳<sup>1)</sup>、吉田 秀夫<sup>1)</sup>、尾崎 和美<sup>1)</sup>、羽田 勝<sup>1)</sup>、  
吉岡 昌美<sup>1)</sup>、吉田 賀弥<sup>1)</sup>、竹内 祐子<sup>1)</sup>、星野 由美<sup>1)</sup>、松本 尚子<sup>1)</sup>、永田 俊彦<sup>2)</sup>

1) 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部口腔保健学講座

2) 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部顎病態制御学講座

(キーワード：口腔保健・福祉、健康長寿支援、ホスピタリティ・マインド)

## Report of the health support program for the aged using the practical training of oral health and welfare by the dental students.

Hiroki Iga<sup>1)</sup>, Disuke Hinode<sup>1)</sup>, Masanori Nakano<sup>1)</sup>, Hideo Yoshida<sup>1)</sup>, Kazumi Ozaki<sup>1)</sup>, Masaru Hada<sup>1)</sup>, Masami Yoshioka<sup>1)</sup>, Kaya Yoshida<sup>1)</sup>, Yuko Takeuchi<sup>1)</sup>, Yumi Hoshino<sup>1)</sup>, Naoko Matsumoto<sup>1)</sup>, Toshihiko Nagata<sup>2)</sup>

1) Subdivision of Oral Health and Welfare, Institute of Health Biosciences,  
The University of Tokushima Graduate School

2) Subdivision of Oral and maxillofacial Dentistry, Institute of Health Biosciences  
The University of Tokushima Graduate School

(key words: oral health and welfare, health support program, hospitality mind)

### 1. はじめに

急速な少子高齢化が進行する徳島県において、健康長寿社会の実現は重要な政策目標である。そのためには「適切な口腔管理によって生涯にわたって口から栄養を摂取すること」が重要であり、その担い手を養成している徳島大学歯学部のみならず役割は極めて重大である。歯学部では創立以来「国民の健康長寿に寄与できる歯科医師の養成」を目指して教育、研究を行ってきたが、この目標を達成するためには歯科医師の養成だけでは不十分であり、より専門的で質の高いコ・デンタルの養成が強く望まれるようになってきた。このような社会背景のなかで平成19年4月に全国で5校目の4年制歯科衛生士養成機関として歯学部口腔保健学科が誕生した。そこで本学部では「超高齢社会を迎えた現在において国民の健康長寿社会の実現に貢献できる新しい歯科医療従事者の養成」を教育目標に掲げ、これまでに無い、新しい教育プログラムの開発に着手し、今回の取り組みを立案、実施したものである(図1)。この取り組みはこれまでの歯学教育にはない、全く

新しい教育プログラムであり、平成19年度から2年間の徳島大学パイロット事業支援プログラムに採択された。今回はその概要と成果を報告する。

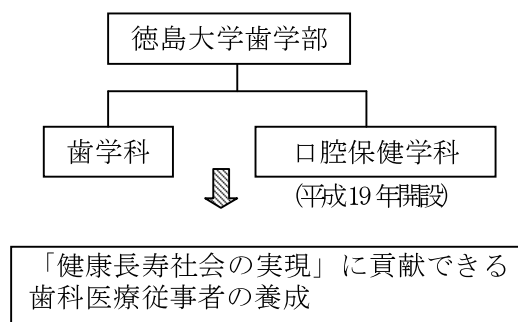


図1 徳島大学歯学部の構成

### 2. 目的

人間関係が希薄な現代にあって、近年コミュニケーション能力が不足している成人が増加していることが危惧されており、それは歯学部においても例外ではない。今回の取り組みは、コミュニケーション能力ならびに自己の健康管理能力を高め、他を思いやる慈しみのこころの涵養を期待するものである。さらに、口腔保健・福祉体験実習

を通じて歯科医療や保健福祉の担い手となり、健康長寿社会の実現に寄与できる人材の育成を目的とする。

### 3. 取り組みの概要 (表1)

表1 取り組みの全体像

実施時期 対象学生	実施内容	実施項目
<b>(1) 1年次前期</b> ・口腔保健学科 16名 (必修) ・歯学科 8名 (希望者)	入学早期の口腔保健に関する体験実習	①食と健康学習 ②歯磨き指導学習 ③気づきの体験学習 (学内教員)
<b>(2) 1年次後期</b> ・口腔保健学科 16名 (必修) ・歯学科 6名 (希望者)	社会福祉施設での高齢者とのかかわり体験	①気づきの体験学習 (鳥取大学 高塚人志先生) ②高齢者交流実習
<b>(3) 2年次前期</b> ・口腔保健学 16名 (必修)	高齢者施設における健康指導教室体験	デイケアにおける「お口の健康長寿教室」の補助

#### (1) 1年次前期 (図2)

実施日時：毎週金曜日の昼休み

学生：口腔保健学科 16名 (必修)

歯学科 8名 (希望者)

実施内容

##### ① 食と健康学習

教員と学生と一緒に会話をしながら食事を楽しむ (30分：15回)。自由会話からはじめ、食、咀嚼、健康等について教員と話し合い、またそのうち3回は、教員がそれぞれの専門分野の話題を提供する。

##### ② 歯磨き指導学習

昼食後に歯科衛生士教員等から正しい歯磨き法の指導を受け、自ら適切な口腔清掃法を修得する。(15分：5回)。学生のパートナー同士の相互歯磨きプログラムによって他者に対する口腔ケア介入を体験し、相手に心地よい効果的な歯磨き法を修得する(15分8回)。

##### ③ 気づきの体験学習

学内教員による「気づきの体験学習」を経験する (2回)。



図2 1年次前期のプログラム

#### (2) 1年次後期 (図3)

実施日時：木曜日 4, 5, 6 時限目

(口腔保健学科 早期臨床実習)

学生：口腔保健学科 16名 (必修)

歯学科 6名 (希望者)

実施内容

① 鳥取大学医学部の高塚人志准教授の指導の下、同大学の取り組みをモデルとしたグループでの演習形式による「気づきの体験学習」(1回)を経験する。

② 養護老人ホーム白寿園において、対応がそれほど困難ではない高齢者をパートナーとして、1対1のかかわりを持つ。施設職員の通常の業務や利用者の施設での生活スタイルを崩さないで一緒に時間を過ごし、ヒューマン・コミュニケーションとホスピタリティ・マインドを学ぶ(交流9回とふり返し1回)。

なお実習期間内は同じパートナーと交流することを原則とした。

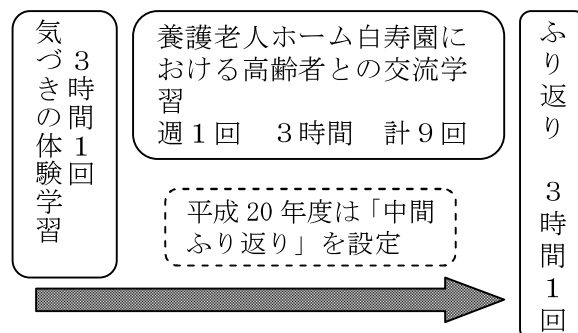


図3 1年次後期のプログラム

### (3) 2年次前期

実施日時：金曜日 1, 2, 3 時限目 1 回  
(口腔保健学科 早期臨床実習)

学生：口腔保健学科 16 名 (必修)

実施内容：

通所リハビリテーション(デイケア)を利用する要介護高齢者に対して歯科衛生士が行う歯科保健指導「お口の健康長寿教室」の実践場面を見学し、補助する。具体的には大学近在のデイケア施設(老人保健施設三成会キュアセンター)において本学歯科医師、歯科衛生士教員が行う口腔に関する講話、口腔機能訓練(健口体操)、保健指導などを補助するもので、口腔機能向上を目指した現場の取り組みを体験する。

#### 4. 取り組みの特徴と新規性

すでに歯学部の歯科医師養成課程では5年次、6年次の臨床実習のなかに学外の福祉施設等における体験実習を取り入れているが、その回数も時間数も極めて少ないものであり、実社会における歯科保健・福祉を十分理解させるには至っていない。この分野の一層の理解と社会歯科学への向学心を深めるためには、学習方略として常に社会背景を認識したカリキュラム構成が必要であり、生活者が存在する現場での早期からの体験学習が有効であると考えられる。今回の取り組みは、平成19年度に新設となった口腔保健学科の新しい教育システム構築と歯学科のカリキュラム改善を念頭に置いたものであり、「質の高い大学教育推進プログラム」(教育GP)を目指した歯学部全体の取り組みでもある。

#### 5. 取り組みの目標

徳島大学歯学部では、歯科医師・歯科衛生士の立場から「対人援助職を志すものとしての自覚」と「人間力の向上」を初年次教育の達成課題としており、これを踏まえて以下のような取り組みの目標を設定した。

- ①基本的マナーを身につけること(対人援助職としての基盤形成)
- ②コミュニケーション力を養うこと

- ③ホスピタリティ・マインドを身につけること
- ④相手を受容して適切に行動できること

#### 6. 期待される効果、有効性

入学直後から段階的に体験学習を行うことで、学生のモチベーションを高めることができる。特に養護老人ホームの体験学習ではヒューマン・コミュニケーションとホスピタリティ・マインドを学び、将来の専門的なスキルの向上にもつながるプログラムである。

#### 7. 取り組みの成果報告

##### (1) 1年次前期

##### ①食と健康学習

入学直後のお互いに十分な相互理解ができていない時期において、学生と教員と一緒に食事をするこのプログラムはアイスブレイキングとしての意味を持っており、以後のプログラムを実施するための第一歩として極めて有用であった(図4)。また教員にとっても学生との距離を縮める良い機会となった。



図4 学生と教員との昼食風景

##### ② 歯磨き指導学習

昼食後に教員等から正しい歯磨き法の指導を受け自ら適切な口腔清掃法を修得する(図5, 6)。さらに学生のパートナー同士の相互歯磨きプログラムによって他者に対する口腔ケア介入を体験し、相手に心地よい効果的な歯磨き法を修得する(図7)。



図5 口腔内写真撮影



図6 歯磨き実習



図7 パートナーとの相互歯磨きプログラム

## (2) 1年次後期

### ① 気づきの体験学習(鳥取大学医学部准教授 高塚人志先生)(図8)

「気づきの体験学習」は、鳥取大学医学部准教授高塚人志先生の指導の下に「ねえねえ! 聞いて聴いて!」、「駅伝ランナー」、「思いこみ」ようないくつかの演習を行うプログラムである(図9)。これから共に学ぶ学生同士が凝縮された時間の中で試行錯誤しながら関わり方を

考え、相手の立場に立ったコミュニケーションの取り方を考え、基本的マナーを学び、さらにはホスピタリティ・マインドに気づく極めて有用なプログラムであった。



図8 高塚人志先生



図9 気づきの体験学習

### ② 高齢者交流学习

#### a. 事前学習

事前の実習施設(養護老人ホーム白寿園)の大西智城施設長より、真言宗願成寺住職という立場から「生きることの意味」や「生と死」などをテーマにした講義を受けた(図10)。さらに白寿園事務長より施設の概要と利用者について説明を受けた後、無作為に配当されたパートナーとなる高齢者に対して、自己紹介を含めた手紙を書き、施設職員を通じて届けていただいた。



図10 大西智城 先生



図12 高齢者との1対1交流学习

b. 養護老人ホーム「白寿園」

毎週木曜日午後の3時間、施設を訪問して高齢者と1対1の交流を行った(図11, 12)。学生には実習毎のレポートの提出を義務付け、実習担当教員が毎回のレポート内容を基に学習記録(レポート内容の抜粋と交流写真)を作成して各学生に配布し、また施設にも掲示した(図13)。

交流最終日に学生はパートナーに御礼状を手渡した。また交流学习終了後の施設担当者を招いた学生のふり返し授業では、パートナーとのやり取りで印象に残った場面や会話について、「自分はどう感じたか」や「自分自身が成長したこと」などを一人ずつ発表させることで仲間同士の共感を深めさせた。パートナーから学生に向けての手紙は匿名で披露し、施設担当者からはフィードバックとして感想やアドバイスを含む励ましの言葉をいただいた。なお平成19年度は交流終了後のみの「ふり返し」であったが、平成20年度は4回の交流を終えた時点で「中間ふり返し」を設定し、計2回のふり返しとした(図3)。



図13 学習記録(第2号)

(3) 2年次前期

通所デイケア施設「老人保健施設三成会キュアセンター」において歯科衛生士教員が行う口腔保健指導「お口の健康長寿教室」に学生を同行させ、要介護高齢者を対象とした種々の口腔機能訓練の補助者として参加させた(図14)。



図11 高齢者との1対1交流学习



図14 「お口の健康長寿教室」

(4) アンケート調査と交流学习の自己評価

交流学习では学習記録とともに毎回の交流に

関する自己評価を10点満点で記載させた。また9回の交流終了後にアンケート調査を行い、特に自由記載として「成長したことベスト3」の記載を義務づけた。

## 8. 結果および考察

今回の取り組みは、受験から解放され学習意欲が緩みがちな入学直後から、段階的に体験学習を行うことによって、学生のモチベーションを高め、さらにヒューマン・コミュニケーションやホスピタリティ・マインドの向上を目指した新しい歯科教育プログラムである。特に入学直後の「食と健康学習」や「歯磨き指導学習」は、同級生となつたお互いの距離を縮める良い機会となり、また歯科医療を学ぶ学生としてのモチベーションの向上にも有用であった。また「気づきの体験学習」では様々な演習を通して、相手の立場に立つたコミュニケーションの取り方を考え、基本的マナーを学ぶことができ、高齢者交流学習前に不可欠なプログラムとなった。

「高齢者交流学習」において、実習の初めの頃は「気づきの体験学習」の授業で気づいたことがうまく生かせず、パートナーとの意思疎通にも苦労していたことがその学習記録から窺えた。しかし相手が高齢者ということに次第に配慮出来るようになり、声の大きさ、速さに気を配って会話ができるなど、コミュニケーション力が育まれるようになっていった。お互いに共通の話題がなく、黙ってしまう時間を気にして焦っていた学生もうまくコミュニケーションがとれるようになると、沈黙の時間に焦燥感を感じることなく、肯定的に受け入れられるように変化した。パートナーの「話をしてくれるだけでもありがたい。」という言葉から、笑顔になつてもらうために積極的に話しかけたという記述もあった。さらに交流回数を重ねるごとに「心が揺さぶられた」というような表現が学習記録に数多く認められるようになった。

この学習は施設入所高齢者の日常生活において、対話を基本として共に過ごすというものであり、プログラムとしては「単調」である。そのため学習記録においては、最初は充実していても次

第に内容が希薄になり、同じ記述を繰り返す傾向になると予測していた。しかし今回の学習記録から見えてくる変化としては、回を重ねるごとに自分の内面と向き合い、自分自身に問いかけるような記述内容へと変化し、文章量も増える傾向にあった。またふり返り授業では交流学习の場面で学んだことを文章化し、人に聞かせることで自己覚知につなげるために「自分への手紙」を発表させた。手紙の発表の際には数人の学生が感極のあまり泣き出すなど、予想以上にインパクトのある交流になったと考える。このように「ふり返り授業」はこの学習成果を左右する重要な要素であり、平成20年度には、4回の交流が終了した時点で「中間ふり返り」を設定して後半の交流の意義をより明確にさせた。交流毎の自己評価の平均点も概ね上昇傾向にあり(図15)、初回の交流から3~5点も上昇した者が8名認められた。

鳥取大学医学部<sup>1)</sup>や徳島大学医学部<sup>2)</sup>での評価を参考に、交流学习終了後「自己の成長したことベスト3」を自由に記載させ、本取り組みを通しての自己の変化をとらえる試みを行った。ふり返り授業に参加した学生20名のうち、多くの学生が「自分ばかり喋らずに、相手の話を良く聞くようになった」「笑顔で挨拶をするようになった」などと記載し、「普段の表情が穏やかになった」とする学生もみられた。これらの記載内容を①対人援助職としての基盤形成、②コミュニケーション力の向上、③ホスピタリティ・マインドの気づきや体得、④相手を受容した上での適切な行動、の4つに分類した(表2)。その結果、②のコミュニケーション力の向上に関する記載が90%と最も多く、「謙虚さ」や「笑顔の大切さを知る」など①に関わる内容が50%であった。また③に関する記載は40%、④に関しては15%であった。これらの結果は、「対人援助職を志すものとしての自覚」や「人間力の向上」といった当初の目標に沿うものであり、本取り組みの有効性を強く示唆していると考えられる。

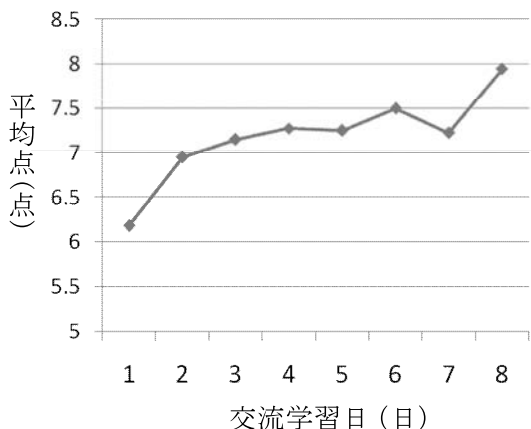


図 15 自己評価点数の平均点の推移 (10 点満点)

表 2 成長したことベスト 3  
(交流学习後のアンケートより)

取り組みの目標	項目	人数
①対人援助職としての基盤形成	積極性	3
	謙虚さ	3
	笑顔の大切さを知る	3
	素直さ	1
	優しくなれた	1
	冷静さ	1
②コミュニケーション力の向上	伝え方	2
	コミュニケーション力	15
	聴く態度	4
	聴くスキル	3
	非言語コミュニケーション	2
	コミュニケーションをとる態度	11
③ホスピタリティ・マインドの気づきや体得	思いやり	2
	共感	3
	相手の対場の理解	3
④相手を受容した上での適切な行動	高齢者との接し方	1
	受容と行動	2

### 9. まとめと今後の発展

「医療人としての基盤教育」と「人間力の向上」を目標とした今回の取り組みは学生アンケートなどから、目標達成に適した有効な教育プログラムである。

徳島大学歯学部ではこの取り組みを継続させて、地域が学生を育成すると同時に大学も地域に貢献するという「地域育成型歯学教育」の確立を目指している。さらに将来的には他の機関の協力も得て「健康長寿社会」の実現に貢献できる新しい口腔保健・福祉教育プログラムに発展させたいと考えている (図 16)。

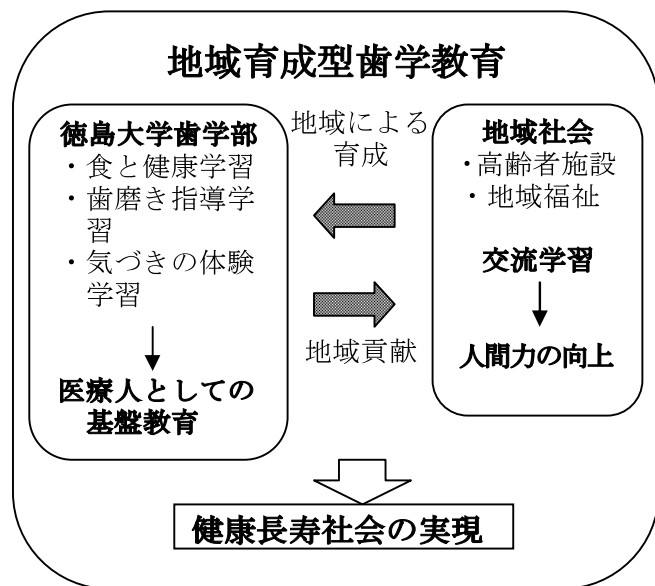


図 16 今後の発展

### 参考文献

- 1) 高塚人志：いのちを慈しむヒューマン・コミュニケーション授業，大修館書店，東京，2007
- 2) 長宗雅美，寺嶋吉保ら：現代G P「医療系学生の保育所実習による子育て支援」－乳幼児との継続交流による体験型コミュニケーション授業実施報告と終了時の評価，大学教育研究ジャーナル，第5号，105-115，2008.